

前回、前々回と、私たちはこの前章の8章から、主がピリポを遣わして、サマリヤの人々とエチオピアの宦官を救いに導かれたことを見ました。そして、それは教会に対する激しい迫害がエルサレムで起こったからですが、主はそのような逆境とも思える中でも、聖霊をもって弟子たちを力づけることで、ご自分の救いの計画を進められたのです。

さて、今日から9章に入りますが、ここには教会に対する迫害をしていた中心人物のサウロ（サウロはユダヤ名、パウロはローマ名）が登場してきます。1-2節「さてサウロは、なおも主の弟子たちに対する脅かしと殺害の意に燃えて、大祭司のところに行き、2 ダマスコの諸会堂あての手紙を書いてくれるよう頼んだ。それは、この道の者であれば男でも女でも、見つけ次第縛り上げてエルサレムに引いて来るためであった」。

あることに対して、何の疑いもなく熱心になれるというのは、ある意味ですばらしいことだと思います。でも、熱心であれば、それが常に良いことであり、正しいかという、必ずしもそうとは言えません。なぜなら、すべての人は生まれながらに自己中心、罪人だからです。ですから、私たち人間の熱心は、簡単に間違った方へ暴走してしまうこともあるのです。

実に回心前のパウロがそうでした。彼は自分のしていることが正しいことであり、それが神様に喜ばれるものであると堅く信じていました。ですから、エルサレムにいる主の弟子たちに対する迫害だけでは満足せず、その迫害の手を、ダマスコにまで伸ばすのでした。前の地図を見て下さい。ダマスコとは、エルサレムの北東約160マイルのところにある町で、当時のシリアの首都でした。

サウロは、わざわざそんなに離れた所まで行こうとしたわけですから、教会を滅ぼうとした彼の本気さが伝わってきます。そこで彼は、ダマスコでも権威をもって主の弟子たちを捕らえることができるよう、大祭司から手紙を書いてもらうのです。いかがでしょうか？この時点で、彼は神様の目になかったこと、つまり、良いこと、正しいことをしていますか？もしそうだとしたら、この次に続く内容は、彼がダマスコで、いかにして主の弟子たちを捕らえ、彼らをエルサレムにまで引っ張ってきたかということになると思うのです。ところが、ダマスコに向かう途中、彼が、いや誰も全く考えもしなかったことが起こります。

3-5節「ところが、道を進んで行って、ダマスコの近くまで来たとき、突然、天からの光が彼を巡り照らした。4 彼は地に倒れて、『サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか』という声を聞いた。5 彼が、『主よ。あなたはどなたですか』と言うと、お答えがあった。『わたしは、あなたが迫害しているイエスである』」

ダマスコの弟子たちを捕らえることに躍起になっていたサウロは、突然、天からの光に襲われ、地に倒れてしまいます。そこで主イエスの御声を聞くのです。「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか」と。彼は問いました。「主よ。あなたはどなたですか」と。すると主は言われました。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」と。サウロにとって、実に信じ難いこと、あり得ないことがそこで起こったのです。

どうぞイメージして見て下さい。サウロは、ステパノを殺すことに同意していた人です。使徒たちが、ナザレのイエスこそ、神様が聖書を通して預言しておられた救い主であると証言することに強く反対していた人です。彼のうちには、「もしかしたら」と少しでもその可能性を何うような様子は全く見られません。そんなサウロに対して、主は彼の熱心さは間違った方に向いていること、つまり、弟子たちを迫害することは、ご自分（主）を迫害することであり、ご自分は、サウロが熱心に仕えていると思っていたイスラエルの神であることを示されたのです。

この時のサウロのショックといえ、それはかなりのものであったと思います。この後、彼は三日間、何も食わずに過ごしますが、それは祈るための断食であったことはもちろんのこと、それはあまりのショックの大きさのゆえであったと思うのです。これまで彼が堅く信じ、その信仰に基づいて行ってきたことが、主に喜ばれるどころか、その真逆、主に敵対するものであったわけですから、それは当然と言えるでしょう。それほどのことこの時、彼の身に起こりました。

6節「立ち上がって、町に入りなさい。そうすれば、あなたのしなければならないことが告げられるはずで
す」。このことばを聞いたサウロは、立ち上がるわけですが、8節に「目は開いていても何も見えなかった」
とあるように、彼の目は見えなくなっていた。主は、彼に「あなたのしなければならないことが告げられるは
ずです」と言われましたが、サウロは、目が見えない状態で、それが何であるかを待たなくてははいけません
でした。もしこれがあなただったら、このような形で主があなたに出会われることを幸いだと思いませんか？それ
とも、自分は主からさばきを受けたと思われるのでしょうか？

サウロは、どのような思いでいたと思いますか？理由がどうであれ、彼がこれまで主の弟子たちを迫害してき
たのは事実です。そして、そのことを一番知っていたのは彼自身でした。ですから、このことを彼が主のさば
きとして捉えていても全然おかしくないと思います。目が見えない人が見えるようにされたというのであれば
話はまだわかりますが、この時は、その反対のことが起こったのです。しかも、主は、サウロがご自分を迫害
していることをはっきりと示されたわけですから、サウロが、このことを主からのさばきとして受け取っても
それは自然のこのように思えます。

では、どうですか？主は「さばき」を目的として、サウロの目を閉ざされたのでしょうか？これまで彼がして
きたことの報いとして、主は彼の目を見えなくされたのですか？もし、そうであるなら、なぜ主は、お金のこ
とで聖霊を欺いたアナニヤとサツピラ夫婦のように、彼のいのちを取らなかつたのでしょうか？サウロは、聖
霊に満たされていたステパノの殺害に賛成しただけでなく、彼自身の手で多くの弟子たちをひどい目に遭わ
せてきた人です。この時も、まさにダマスコにいる弟子たちを男でも女でも関係なく、みな捕らえて、彼ら
を苦しめるために、ダマスコに向かったのです。そんな人が、主のさばきを受けてその場で息絶えてい
ても、誰も文句を言わないどころか、むしろ、みな喜んだに違いありません。「ところが」です。

10-12節「さて、ダマスコにアナニヤという弟子がいた。主が彼に幻の中で、『アナニヤよ』と言われたの
で、『主よ。ここにおります』と答えた。11すると主はこう言われた。『立って、「まっすぐ」という街路
に行き、サウロというタルソ人をユダの家に尋ねなさい。そこで、彼は祈っています。12彼は、アナニヤと
いう者が入って来て、自分の上に手を置くと、目が再び見えるようになるのを、幻で見たのです。』」。

サウロの目を閉ざされた主は、アナニヤという弟子をサウロのもとに遣わすことで、彼の目を再び見えるよ
うにされることを最初から計画しておられました。でも、そう言われても、サウロがどういう人かをすでに
聞いていたアナニヤは躊躇します。それでも、主はアナニヤを説得し、サウロのもとへと遣わされるのです。
17節「そこでアナニヤは出かけて行って、その家に入り、サウロの上に手を置いてこう言った。『兄弟サウロ。
あなたの来る途中、あなたに現れた主イエスが、私を遣わされました。あなたが再び見えるようになり、
聖霊に満たされるためです。』」。

サウロの目は、なぜ閉ざされたのか？それは、再び見えるようになるためです。つまり、そのようにして主の
御力を体験する必要があったのです。これまでのサウロは、「自分は、自分のしていることをよくわかっ
ている。自分は誰よりも神様の前に正しいことをし、主に喜ばれる者である」と自負していました。その彼の自
己義認的なプライド（高ぶり）は、一度、粉々に砕かれる必要があったのです。そのようにして、それまで彼が
頼りにしていた自分自身という偶像が破壊されることで、まことの神であるイエス・キリストに望みを置き、
主の聖霊に満たされるためでした。

ですから、主の御心は、この一連の出来事を通して、サウロの目（彼の心の目、信仰の目）を開くこと
でした。主は、ご自分に敵対することがいかに罪深く、それが決して赦されるものではないことを誰よりもよく知
っていたサウロに、彼自身の罪深さを気づかせることで、でも、その彼にさばきではなく、あわれみを示され
ることで、ご自分がどのようなお方であるかを現されたのです。

18-19節「するとただちに、サウロの目からうろこのような物が落ちて、目が見えるようになった。彼は立ち
上がって、バプテスマを受け、19 食事をして元気づいた。サウロは数日の間、ダマスコの弟子たちとともに
いた」。このようにして、つい数日前まで教会の大迫害者であったサウロは、悔い改めと主への信仰によって
バプテスマを受け、それまでとは180度反対の全く新しい主の弟子として造り変えられるのです。ここには

「彼が聖霊に満たされた」とは記されていませんが、20 節以降を見れば、彼が聖霊に満たされていたことは明らかです。

20-22 節「そしてただちに、諸会堂で、イエスは神の子であると宣べ伝え始めた。21 これを聞いた人々はみな、驚いてこう言った。『この人はエルサレムで、この御名を呼ぶ者たちを滅ぼした者ではありませんか。ここへやって来たのも、彼らを縛って、祭司長たちのところへ引いて行くためではないのですか。』22 しかしサウロはますます力を増し、イエスがキリストであることを証明して、ダマスコに住むユダヤ人たちをうろたえさせた」。

聖霊に満たされているなら、私たちは「イエスは神の子である」と主を証するようになります。あれだけの迫害者サウロに、主があわれみを示し、救われた理由はそこにあります。サウロのもとに行くことを躊躇するアナニヤに、主はこう言われたのです。15 節「行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です」。主は、サウロをご自分の弟子とし、彼によってご自分の名を、人々の前に運ばせるために、彼を選びの器とされました。

でも、主はこうもおっしゃったのです。続く 16 節「彼がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示すつもりです」。アナニヤは、このことばを聞いて、主がサウロに復讐される、罰を与えられると考えたので、サウロのもとに行ったのでしょうか？この主のことばは、そういうことを意味していたと思いますか？つまり、主は、死をもって彼の犯した罪に対するさばきを行うのではなく、これからの彼の人生において彼が主のために苦しむことをさばきとされたのでしょうか？

もしそうだとしたら、私たちはみな、信仰をもった後、何らかの苦しみに遭う度に、主からさばきを受けている、罰を受けていると考えなくてはいけなくなってしまう。それでどうやって主イエスのすばらしさ、そのあわれみの、恵みの大きさを証することができますか？サウロは、彼が最後に記した手紙、**第二テモテ 2:9-10**でこう語っています。「私は、福音のために、苦しみを受け、犯罪者のようにつながれています。しかし、神のことばは、つながれてはいません。10 ですから、私は選ばれた人たちのために、すべてのことを耐え忍びます。それは、彼らもまたキリスト・イエスにある救いと、それとともに、とこしえの栄光を受けるようになるためです」。

サウロは言います。自分は「福音のために、苦しみを受け、犯罪者のようにつながれている」と。でも、「私は選ばれた人たちのために、すべてのことを耐え忍びます」と。彼は誰のために苦しみを耐え忍んでいたのですか？彼自身のため、彼が犯した過去の罪のためですか？彼自身のように、主がご自身のあわれみのゆえに選んでおられる人々のため、彼らが主イエスによる救いと、とこしえの栄光を受けるためにです。彼にはそれが誰であるかはわかりませんでした。だからこそ、いつでも、どのような時にも、人々に主イエスを証し続けたのです。信仰のゆえに捕らえられ、牢に入れられる中でも、彼はそこでも兵士たちに福音を語りました。

今日、私たちが主イエスを神の子と信じ、その救いにあずかっていることは当然のことではありません。私たちは皆、その自己中心さ、罪深さゆえに、主からさばきを受けて、永遠の滅びに至って当然な者です。でもそのことを望まない父なる神様は、ご自分の御子イエス・キリストをこの罪の世に遣わし、私たちの代わりに、彼を十字架にかけてさばくことで、私たちが赦され、永遠のいのちを得られる道を備えて下さったのです。

主イエスは、サウロのもとに行くアナニヤどころではない、ご自分を苦しめ、殺す者たちのもとに、神のあり方を捨ててまでして、自ら進んで来て下さいました。それは、さばきという上からの力によってではなく、自らの命を犠牲にするという下からの力によって、ご自分がどのようなお方であるか、いかにあわれみと恵みとに満ちたお方であるかを私たちにわからせて下さるためです。私たちは、この主によって選ばれたので、今日、すばらしい主の救いにあずからせていただいています。私たちが、主の御霊、主の恵みに満たされることで、まだ主を知らない人々のもとに主の名を運ぶためにです。